

～地域の未来と共に～

医療法人
熊谷総合病院
院外報「くまそう」

くまそう
KUMASOU

Vol. 1 2018.4

熊谷総合病院は、大きく変わります。



現在実施中の人間ドック・脳ドックに加え、今年7月にはPET総合検診棟がオープン。
PET-CTがんドックも開始します。



PET総合検診棟エントランス完成予想図

新生熊谷総合病院のこれから －我々の目指す方向－



熊谷総合病院 院長 中村 信一

はじめに

熊谷総合病院は、JA埼玉厚生連から社会医療法人「北斗」(北海道帯広市)に経営が引き継がれ、一昨年、2016年の5月から新法人として再スタートいたしました。新生熊谷総合病院はこれからも地域の医療を常に高く保つため自ら進んで学習し、地域の必要に応える高度医療の実践を目指します。そして地域のあらゆる機関と協力して世界に誇れる病診連携をこの地、熊谷に築きあげます。今回この書面をおかりして、地域の皆様に新しい熊谷総合病院の目指す方向をご紹介いたします。

病院概要説明: 熊谷総合病院の沿革

当院、熊谷総合病院は1945年(昭和20年)6月11日、農業会病院として開設いたしました。しかし、不運にもその開院のたった2ヶ月後(8月14日、第二次世界大戦終戦の前日)、熊谷空襲により大半を消失し、同年再建しております。まさに産声をあげた直後に起こった大惨事でした。

当時の時代背景を考えても非常に残念な辛い出来事であったと考えます。

その後の当院が歩んできた今日までの大きな沿革と今後の計画日程を表-1に示しましたのでご覧下さい。

熊谷総合病院の目指すところ

半世紀以上の歴史を経た現在、私たちは新しい病院理念(表-2参照)のもとハード、ソフト両面の充実を図りながら地域医療の向上に職員一同奮闘努力しております。

今後、当院は従来からの消化器内科、外科、整形外科を中心とした診療体制に加え脳神経外科や循環器内科、リハビリテーションなどの診療科を強化していきます。(表-3参照)

循環器内科診療体制の強化に付きましては、新たに血管放射線撮影装置「INNOVATION GS520」を導入し医療機器の充実を行うとともに、一昨年の2016年7月から循環器内科「ハートセンター」の診療体制を

開始いたしました。当院が今まで対応のできなかった狭心症や心筋梗塞の心臓カテーテル検査による診断・治療が可能となりました。

昨年の2017年、私たちは皆様のお陰をもちまして90余名の新人入職者(うち医師11名)を迎える事が出来ました。

4月に都立神経病院(東京都府中市)てんかん外科の森野道晴医師を迎え、新たに「てんかんセンター」を開設いたしました。5月からは森野医師の指導により脳神経外科の救急受入れを24時間体制として夜間・休日にてんかん発作を起こした場合も、「てんかん救急ができる病院」となりました。このほかに脳神経外科診療体制の強化として、定位脳手術に変わる本態性震戦の治療法のひとつである経頭蓋集束超音波装置(FUS)を導入いたしました。FUSはMRIと連動して用い患部を超音波で凝固する新しい治療法であり、定位脳手術と比べ頭部を切開する必要がないより低侵襲の治療法でもあります。このFUSは2016年12月厚労省に承認され、現在最新治療の臨床試験が進んでおります。当院もこれに参加し10症例を目標に臨床データを蓄積しているところです。現在このFUSを導入している医療機関は全国に9施設あるのみです。当院に最新治療機FUSがあることを、震え

に悩んでいる方々、地域の医療機関の多くの先生方に知って頂き、大いに活用して頂きたいと思います。

8月、回復期リハビリテーション病棟(回復期病棟)50床を新たに開設いたしました。合計66名のリハビリテーション専門職(セラピスト)が在籍しています。セラピストの充実により手厚いリハビリを毎日継続、休日を含む365日おこなう事が可能になりました。もともと一般病棟で行っていた早期離床チーム(E-MAT)の活動を発展させる形で、切れ目のない病期に応じた対応が可能となりました。これにより早く退院して住み慣れた自宅で自分らしい生活を送りたいという患者さんの期待に応える在宅復帰、社会復帰を促進、病院と自宅をつなげる切れ目のない支援体制が充実いたしました。

また、病院全体の体制強化として特記すべき事は、次の2点が挙げられます。当院の救急車受け入れ台数および受け入れ率は過去と比べ大幅に上昇し、9月には埼玉県知事より救急医療功労団体として表彰されました。これに加え、当院、遅れ馳せながら日本医療機能評価機構のおこなう受審に無事合格し厳しい基準を満たした認定病院との認可を頂きました。私、これら名誉ある実績を収める事が出来たのは全職員が新しい病院理念のもと一致

団結して時代にふさわしい総合病院となる事を目標に各自努力した結果の一部と自負しております。

■ 熊谷総合病院のこれから

平成の節目となります本年(2018年)、我々、熊谷総合病院はこれまで以上に活気に満ち溢れた新しい春を迎えようとしております。今春は50名の入職者(内 医師12名)を迎えました。PET総合検診棟および7階建て新病院棟の建設も無事着々と進んでおります。2階建てのPET総合検診棟は今年7月にオープンいたします。来年の春には新病棟が完成して、再来年2020年には玄関棟が完成して一連の再整備計画が完了します。

新たに開設する「PET総合検診棟」は癌の早期発見に有効な最新鋭のデジタルPET-CTを初め、放射線がん治療機のトモセラピーを導入して、第二次予防医療(発症前対応)と癌治療の強化をおこないます。現在、日本全国にPET(Positron Emission Tomography:陽電子放射線断層撮影)機器を有する医療施設はおよそ400箇所ありますが、当院が導入する最先端のデジタルPET-CTを臨床診療に用いている施設は現在全国で7施設のみと聞いており、北関東地域では当院が最初の導入事例となります。完成のあつ

きには是非ともこの最先端の機器を用いるPET総合検診を一人でも多くの地域皆様の健康増進、疾病予防にご利用頂きたいと存じます。

このように我々は地域の医療ニーズに応え最新医療を提供する地域完結型総合病院を目指しています。これからも地域の様々な医療と介護機関の皆様との連携を深め、高度な医療を地域に提供していくたいと考えます。

■ おわりに

これからも私たちは埼玉県北部地区の医療向上には何が必要で、医療人として何を行えば良いのかを地元住民の皆様および周辺地域の医療関係の皆様と共に考えながら歩んでまいります。そして、私ども熊谷総合病院、愛称“熊総(くまそう)”が他院の先駆けとなり、「顔の見える」強い地域連携の基礎にこの地域に必要な新しい医療介護を提供する「モデル病院」となるために今後も地域住民の皆様にご指導とご鞭撻をお願いする次第です。どうぞ宜しくお願ひいたします。

▶ 表－1:病院概要説明:熊谷総合病院の沿革

1945年	昭和20年6月11日 農業会病院として開設(許可病床数45床)
	同年8月14日 熊谷空襲により大半を消失、同年再建
1948年	埼玉県厚生連に移管
1972年	現在地(熊谷市中西1-26-1)に移転診療開始(許可病床数202床)
1974年	総合病院として認可
1979年	新病棟竣工(許可病床数322床)
1980年	救急指定病院承認 救急輪番制参加
1993年	地域医療連携室開所
1994年	開放型病院承認
2001年	訪問看護ステーション開設
2004年	健康管理棟竣工
2006年	一般病棟入院基本届出10対1
2009年	DPC対応病院
2012年	一般病棟入院基本届出7対1
2013年	救急棟・新診療棟完成
2016年	医療法人熊谷総合病院として再出発

熊谷総合病院のこれから

2018年	7月PET検診棟オープン
2019年	4月7階建新病院棟オープン
2020年	9月新玄関棟完成 グランドオープン(表－4参照)

▶ 表－2:病院理念

わたくしたちは、この地に歴史をきざむ熊谷総合病院に勤める医療人です。
わたくしたちは、この地にふさわしい専門的視野と未来への展望に立って、
ここに新生熊谷総合病院の病院理念を制定いたします。

- わたくしたちは地域の一員として、すべての患者さんを心あたたかく迎え入れます。
- わたくしたちは地域の医療を常に高く保つため、みずから進んで学習します。
- わたくしたちは地域の未来をになう若き医療人の育成に励みます。
- わたくしたちは地域の必要に応える最新医療を提供し続けます。

そしてわたくしたちは地域のあらゆる機関と協力して
世界に誇れる病診連携をこの地、熊谷に築きあげます。

▶ 表－3: 熊谷総合病院が目指す機能強化の方向性

1) 第二次予防医療(発症前対応)の強化

脳ドック、心臓ドック、がんドックのメニュー拡大

2) 急性期医療、先進医療の強化

脳神経外科、循環器科による救急受入れ拡大、がん治療の強化

3) リハビリテーション回復期医療の強化

回復期リハビリテーション病棟の機能充実、患者さんの期待に応える在宅復帰、社会復帰を促進

▶ 表－4: 2020年医療法人熊谷総合病院完成図



新たに設置する「PET総合検診棟」は、がんの早期発見に有効な最新機器のPETをはじめ、放射線がん治療機のトモセラピーも導入。2018年7月にオープンします。2019年以降は順次、新病院棟や新玄関棟を建設し、2020年秋にグランドオープンする予定です。

県北部は、遠い群馬県の病院を利用する住民も多い医療過疎地域といわれています。子どもからお年寄りまで安心して暮らせるよう、地域完結型の医療を目指します。

PET総合検診について

総合健診センター長 安本和正



平成30年7月2日に熊谷総合病院の総合健診センターは新しい建物においてリニューアルされるとともに、各種の最新の機器を用いてレベルの高い健診業務を開始いたします。その中でもセンターが最も力を注いでいるのがPET検診ですので、PETについて、その概要を紹介致します。

PETとはpositron emission tomographyの略で、日本語では陽電子放出断層撮影と言われています。すなわち、微量の放射能を含む薬剤を用いた核医学検査の一つであり、放射性薬剤を体内に注入してその分布を特殊なカメラでとらえて画像化します。このPET検査が一番多く用いられるのは、がんの検出です。通常がんの診断には内視鏡検査、超音波検査、CT、MRIなどが用いられていますが、これらの検査では、いずれも各臓器の形の変化を検出しています。一方、PETでは体内のブドウ糖の代謝状況、すなわち機能の変化を探します。その理由は、がんは正常な組織と異なり増殖が激しいため、ブドウ糖を

多く必要とするからです。すなわち、がん細胞ではブドウ糖が多く存在するので、放射線でマークしたブドウ糖に類似した物質を体内に注入すると、がんのある部位ではその物質が増量するため、PETカメラで撮影すると、がんの存在が特定されます。このようにPETでは機能の異常を見ているため、形の変化が少なくCTやMRIでは検出が難しい小さながんも見い出すことが出来ます。

がんの治療では、早期発見が最も重要なと言われていますが、がんの初期には症状が乏しくて発見しにくいのに、異常に気が付いた時には既に病状が進行して治療が難しい事が多々あります。PET検査を定期的に実施すると、症状が出ない極初期のがんも発見が可能になります。なお現在では、PETとCTとを組み合わせたPET-CT検査を行っているため、放射性薬剤の集まる状況だけでなく、CTにより臓器の形状も一緒に撮影します。従って、一度の検査で機能と形態の画像を重ね合わせて見ることができ、より一層診断精

度が向上しています。CTやMRIでは身体を各部位に分けて撮影しますが、PET検査では全身を一度に調べることが出来ます。従って、検査が簡便であり、がんの早期発見だけでなく、手術後などの遠隔転移の発見にも役立ちます。

当院の総合健診センターで使用するPETはジェネラルエレクトロニクス社製の最新機器で、全国で7台目の導入です。解析機能が向上しているため、従来の半分の大きさ、約5mmのがんも検出できます。その上撮影に要する時間も大幅に減少するため被曝量が少なく、より安全に

検査が施行されます。すなわち、より早期のがんも見逃すことがないようになります。

がんの検査を中心にPET検診について説明いたしましたが、がん以外にも炎症部位の特定、心筋梗塞、更にてんかんの治療にもPETは大いに役立っております。現在自覚症状がなくても、がんが身体の中に存在している可能性があります。定期的にPET検診を行って、がんの早期発見に努め、健康寿命を長くしたいものです。既にPET検診の予約を始めておりますので、お気軽にご相談ください。

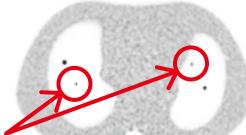
最新高性能PET-CTのご案内



GE Healthcare社製
[Discovery MI]

最新高性能PET-CTの特徴

- ポイント① > 解像度が2倍に
- ポイント② > 検査時間が約1/2
- ポイント③ > 被曝量が約1/2

従来のPET-CT	最新高性能PET-CT
	
約5mmの異常が鮮明に描写されます	

〈従来のPET-CTとの画像比較〉

最新高性能PET-CTのご予約・お問い合わせは、
総合健診センターまでご連絡ください。

048-521-7141